［GIGA 取材］１人１台端末の活用による実践事例

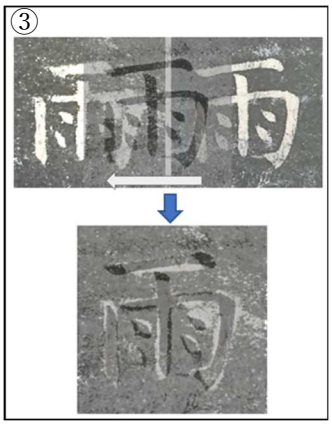
学 校 名	岡山県立玉島高等学校	実践者	安原　亜悠　教諭
実践場面	書道Ⅰ（ 単元：「楷書」 ）		
対象児童生徒（学年等）	普通科１年		

実践の内容

【ねらい】

各古典の書風を生む要素の一つである運筆の特徴を、２つの文字の違いを強調して示すことで分析的に捉えさせる。

【内容】



１　準備

①「九成宮醴泉銘」と「孔子廟堂碑」で共通して用いられている一字を切り出してスライド（google スライドを利用。以下同じ）に並べる。

②片方の文字の色を反転させる（文字の画像を選択→「書式設定オプション」→「色の変更」→「反転」）。その際、元の画像のコピーを反転させる画像の下に配置しておく。

③色を反転させた字をもう片方に重ね合わせる（移動させる画像を選択→「表示」→「モーション」→オブジェクトのアニメーション「フェードイン」「左へスライドアウト」「フェードイン」を選択）。２つの画像が重なって見えるよう、重ねられる画像の透明度を調整する（画像を選択→「書式設定オプション」→「調整」→「透明度」）。

２　授業

④「九成宮醴泉銘」と「孔子廟堂碑」について、生徒に、運筆に着目させてそれぞれの特徴や違いを挙げさせる。

⑤２つの字を並べたスライドを大型提示装置で提示する。

⑥モーションを再生して２つの字を重ね合わせ、その違いを視覚的に認識させる。

生徒は④の段階では、運筆の特徴について具体的に該当の点画を挙げて十分に説明することはできず、感覚的な認識に留まっていた。また、「しっかり」「きっちり」などとそれぞれの運筆から受ける印象について挙げる生徒もあり、そうした印象が具体的に点画のどのような特徴によるものか、については見出す、言語化するのが難しかった。

ICT を活用し、⑥を生徒に示すことで、自分が言語化できなかった、または見出すことができていなかった運筆の違いを具体的に捉えることができ、運筆を分析的に捉える端緒となった。

［GIGA 取材］１人１台端末の活用による実践事例

学 校 名	岡山県立玉島高等学校	実践者	安原　亜悠　教諭
実践場面	書道Ⅰ		
対象児童生徒（学年等）	普通科１年		

実践の内容

【ねらい】

一人一台端末を用いて、生徒に自分の運筆している様を動画撮影させることで、自分の筆遣いを客観視させる。また、臨書では古典における表現がどのような用筆・運筆によって生み出されるかについて、検証・発表させる際の素材とする。

【内容】

実践①「姿勢・執筆法」

年度初めに、自分の基本点画の用筆・運筆を動画撮影させた。撮影の前に、「字の途中で墨継ぎをせず、（起筆）筆管を立てて穂先から紙面に接し、紙を突く。（送筆）筆の弾力を生かし、紙との摩擦を感じながら運筆する。（収筆）穂先で紙面から離れる。」ことを意識するよう伝えた。

撮影後には、事前に意識するよう伝えた点に着目して、自分で動画を確認させた。生徒からは、「これまで筆脈を意識せず、穂先を整えて筆線がきれいに見えることしか考えていなかったことに気がついた」といった反応があるなど、それまで意識していなかった自身の所作の特徴に気がつくことができた。

一人一台端末（chromebook）の位置やカメラの角度を工夫することで、生徒が一人で撮影することができる。

実践②「楷書（顔氏家廟碑）」

顔法について、筆跡から用筆・運筆を探ることをグループで行わせた。検証として点画の部分臨書の動画を撮影させ、学習の最後に動画を用いて具体的な用筆・運筆を発表させた。生徒はグループによる複数の眼でそれぞれの筆遣いによる筆跡を確認し合い、古典の筆跡と比べて筆遣いの検討をした上で、運筆動画を撮影した。発表では、大型提示装置に一人一台端末（chromebook）を接続して動画を再生し、ポイントとなる部分で動画を止め、その部分における筆遣いを細かく説明を行った。

生徒からは「動画があることで、口頭説明を助けてもらえる。一画のなかでも動画を流しながら説明できる部分と、静止させ”筆の腹を下から上に倒して時計回りに旋回してハネる”等細かく説明したい部分とで動画を効果的に使い分けることができた」という声があった。